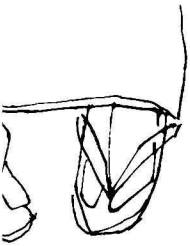
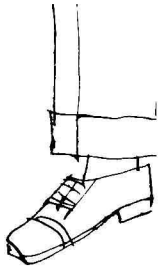
無妙記

深沢七郎



無妙記



深沢七郎

河出書房新社

無妙記

一九七五年八月十日初版印刷
一九七五年八月十五日初版発行

著者　深沢七郎

発行者　中島隆之

発行所　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
振替口座（東京）一〇八〇二　電話（〇三）二九二一三七一一

印刷　暁印刷
製本　中西製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

無妙記　7
妖術的過去　29
女形　49
因果物語　69
小さなロマンス　129
妖木犬山椒　135
村正の兄弟　181
戯曲　楢山節考　225

装幀　早川良雄

無妙記

無妙記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

或る年の早春――三月二十五日の昼すぎ、京の西大路から衣笠山に近い或るアパートの一室で一人の男が隣室の三人の男の話し声を聞いていた。耳を傾けているその男は、もう六十歳をすぎていて持病の腕の神経痛で悩んでいた。その男は今日、すぐそばの北野天神の境内で毎月二十五日に開かれる縁日の出店に骨董品を並べて買い手を待つことになっていた。それが、その男の職業で、毎月二十一日は九条大宮の東寺の境内にたつ市に出掛けて、次の、今日の北野天神の市までの三日間がその男の休み日になっていた。その三日間の休み日も月づきの精算をすることになっていた。縁日の出店で売りさばくよりも同業者のあいだで交換のように行われる仕入れと売りさばきが多いので、精算といっても同業者どうしの精算だった。が、この三日間は腕の神経痛がおきていたのでその精算もすんでいなかったのだった。精算は金の貸し分の方が相手の家へ出掛けて金の催促をするのである。京の三月は、北野天神の出店には梅の花びらも椿の花びらも盛りだが、まだ寒いのである。三月一日から十三日

まで〝お水とり〟と呼ばれる寒い日が続いて、それが終れば暖くなるが彼岸が終る三月二十六日は〝比良の八荒〟と呼ばれる真冬のような寒い日が来ることになっていた。その比良の八荒は、今年は一日早く二十五日の夕刻から雨と風と雪を孕んで来るのだが、北野天神の出店の人達は「降るかもしれへんが」と思ってはいるが降り出すまで店を並べていた。腕の神経痛の男は北野天神まで荷を運ぶことが出来なかったので四条の西洞院の知人に運んでもらって、ついでに店の番まで頼んだのだった。腕の神経痛の男はもうひとつの用事——六波羅の同業者のところへ貸し金を受け取りに行くことになっていた。その貸し金は手持ちの品を廻して、それが売れた金だった。腕も痛いし、北野天神の市の日だが約束の日なので、これから受け取りに行く時間を電話で打ち合わせてから行くことになっていた。その電話は西大路の赤電話のところへかけに行くのだが隣室の三人の男たちも電話をかけに行くらしいのでついでにかけてもらおうと思ったのだった。六波羅の同業者に廻して売れたのは狂言面が四個だった。手許には「お福」と「蛇面」と「翁」「熊野」の四個しかないが、ほかに金物の行道面(ぎょうどうめん)が十以上も残っていて、これは仏像関係なので売れ行きも遠いが看板がわりに持ち出すし、ほかにも紙張子の面がかなりあるのだった。面物は看板でほかの小物——古銭や取手や碗物や花瓶の方が売り買いも早いし、数も量も小物の方が売れるのだった。小物はリンゴ箱や行李や茶箱に入っているので積み重ねておけるが、市へ出すたびに部屋へ拡げて整理を

しなければならないのだった。だが、今朝の北野天神の市へ出した後なのでまだ片づいていない。このせまい四畳半の部屋から出るにも入口を片づけなければ足の踏み場もないので坐ったまま隣室へ声をかけて頼もうとしていたのである。隣室の三人の男は大学生でそのなかのひとりが部屋の借り主で、他の二人は用事があって来たのだった。

「うーん、俺、いま、女(スケ)が来るんだ」

というのは隣室の借り主の大学生で背の高い、ボート部の主将の声である。

「スケーなア。ゆうべのスケか？　新車か？」

と洒落で言うのは「運転手」と呼ばれる大学生である。背も顔つきも中学生ぐらいしかないが自動車部員でクルマの運転ばかりをしているから「運転手」と呼ばれていたのだった。この男はこれから名古屋にドライブして正面衝突をして、夜なかには死骸となって運ばれて来るのだった。そうして、間もなく、そこの金閣寺の裏の火葬場で白骨になってしまうのである。「運転手」と呼ばれる大学生はこれから名古屋までクルマを飛ばすのだが、このボート部の主将を誘いに来たのだった。

「早くしろよ」

と、運転手は急がせた。

「ハートくれよ」

と、ボート部の主将は言った。これも洒落らしい。ハートというのは運転手が胸にさげている「アダシのコゴロ」と呼ばれているペンダントのことだった。ネックレスについているハートの形をした模造ダイヤのペンダントだが、これは運転手が東北弁の女性から貰ったとか、巻き上げたとか言っているが実際はそうではなく、拾ったとか、五十円で買ったものだとかと言われているのだった。前に東北弁の女友達があって「わたしの心は燃えている」というのを「アダシのコゴロはハートなの」と、これも、言ったとか、言うらしいとかとこの大学生たちは言っていた。そんな話題からこのペンダントを「アダシのコゴロ」とこの仲間たちは呼んでいて、運転手の物だがボート部の主将は自分の物のように胸にぶらさげていた。洒落を言えば、それでそのことは解決してしまうのだった。ボート部の主将はこれから運転手と一緒に名古屋へ行くのか、行かないのかもまだきまっていないらしい。もうひとりの男も大学生でやはりボート部の部員だった。部員の中の父親が死んで、あした、その葬式に部員を代表してこのふたりが行くことになっていて、その打ち合せに来たのだった。まもなくここへは主将のデイトの相手が来ることになっていた。その女は、前に、運転手の相手の女だった。が、運転手はまもなくここへ来る女が誰だか知らないのだった。主将はその女と運転手はなるべく顔を合せないほうがいいと思っていた。隣室の腕の神経痛の男は電話をかけに行く話のついでを待っていた。隣室では

「ダレが死んだんだ？」
「部員のオヤジが死んだんだ」
「タイしたことないじゃないか」
「クルマはダレの？」
「いくらにきめるんだ、香典は？」
「タイしたクルマじゃないよ」
「タイしたことしなくてもいいんだ、どうせ学生の香典だから」
「早く片づけろよ、スケなんか」
「タイしたことまで進まないだろう」
「なんだ、シャレだったのか」
「スケが来たら、気を効かせろよ」
「あ、キたらキをキかせてどこかへキえるからな」
「キが早いんだ、オレ」
と、仲間の二人は帰るらしい。腕の神経痛の男は電話のついでがないことになったので自分でかけに行くことにした。隣室では仲間が出て行ったらしい。すぐ、ノックの音がして
「いる？」

と女の声である。
「なーんだ、いま、運転手が」
「逢ったわよ、入口で」
「何か言ったかい？」
「べつに」
と女の声がして大学生の部屋は静かになった。何か話しているらしいが小声になったので聞えない。腕の神経痛の男は部屋を片づけて電話をかけに出掛けた。彼岸から暖い日がつづいたが今日は厳冬のように寒く、曇り日で風も強い。六波羅の同業者の電話はすぐ片づいて、夕方か、夜なら「狂言面」四個の代金四千円は支払ってくれることになった。男はそれから北野天神の自分の売り場へ廻った。毎月の二十五日にたつこの市は三千軒も出店が並んで、植木市から瀬戸物市、呉服市はハギレ物から花嫁衣裳まで、ズボン市から背広市、ジャンパーから靴の市まで、食料品、菓子、雑貨市まで並ぶので、境内はせまくなったうえに人ゴミで自分の売り場へ行くまでにはかなり時間もかかるのだった。風かげんで雨がときどきパラパラするが出店の人達も人ゴミもまだ帰り仕度をしない。腕の神経痛の男の売り場の前が漢方薬の呼び込みで人だかりになって売り場は隠れてしまったのだった。それに店番を頼んでおいた西洞院の手伝い男の姿も見えないのだった。雨も降って来るらしい。人に頼んだ店番

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.